【エッセイ】 私が大学生の頃、通学する電車の中「ピシッ」という音が聞こえた。
　見ると、小さな男の子が泣いている。
　母親が男の子に手話を教えているようで、その音は手を叩く音だった。
　うっすらとした記憶の中で覚えていることは、穏やかな日差しが差し込む車内で、そこだけが照らされていること、そして私の涙が止まらなかったこと。
　この時の風景は、その感情を伴い今も蘇る。
「なぜ、こんな小さな子が心細げに泣いているのだろうか、かわいそうだ」
　そんな感情だったか。
　常々「かわいそう」と思う自分に対して「上から目線で嫌だ」と思うことがあり、私の心の中でずっと引っかかっていた。この光景を見て私は「かわいそうと思う気持ちは良いのか悪いのか？」などという、今から考えれば良し悪しではないと思うのだが、その時は真剣に悩み、考えた末に大学の専攻を福祉に変更し、学んでみた。でも、その答えは見つからなかった。
　社会福祉を学び、結論も出せぬまま大学を卒業した私は福祉の仕事に就いた。スタートは精神保健福祉を専門とする公務員。相談や事業を通して福祉の考えを学んだ。福祉は全面的に「してあげる」ことではなく、2つの側面があると考えるようになった。一つは人が持つ力を「引き出す」こと。もう一つは本人の力でできないことに対する「支援」。支援者は対象者の「持てる力」と「力の限界」を見極め、出来るだけ「持てる力」を引き出し、それが生きていく力になるような支援を行うことが大事なのではないかと。

　あれから30年、今私は小さな町役場の福祉課にいる。
　ここで私は手話に出会った。
「手話は言語」という考えを知り、理解もできた。
　なぜ、あの時母親は子供を叩いていたのか、知る由もない。叩くことを肯定するつもりもない。そのうえで私なりにこの「風景」を、こう理解した。
　言葉は生きていくために必要な手段。耳の不自由な我が子が生きるために必要な言葉を、あの時の母親は懸命に教えていたに違いない。「かわいそう」だけでは生きていく力は育たないのだと。

　やっとたどり着いた。
「かわいそう」と思うことは悪いことではない。そこからその人に興味を持ち、理解が深まるきっかけになるだと。あの時の「風景」は、私の福祉の原点であり、今は穏やかに、優しく私を見守ってくれている。